

学校名：神奈川県立横浜修悠館高等学校

担当：英語（高校3年生）

氏名：古澤 京子

1. 今回の研修における目的やねらい

今年度、※陸上自衛隊高等工科大学の国際コースに在籍する高校3年生のクラス担任と英語の授業を担当している。国際コースには、将来海外で仕事に就くことや国際協力事業に興味を持っている生徒が多い。彼らと関わる中で、自分自身の目を見て、感じた途上国の現状を伝える教育が必要であると感じた。また、生徒たちと一緒に、世界を取り巻く問題について考える授業をしたいと思うようになった。

そこで本研修の目的を、教材作りのための素材収集と位置付けた。

※ 陸上自衛隊高等工科大学とは、陸上自衛官となる者を養成するための防衛省所管の陸上自衛隊の組織であり、生徒に高校卒業資格を取得させるために、神奈川県立横浜修悠館高等学校と提携している。

2. 目的やねらいがどのくらい達成されたか

今回の研修の目的である教材作りのための素材収集は、期待を大きく上回る成果が得られた。（後述の「3. タンザニアから学んだこと」参照）

今年度の研修プログラムは、世界遺産であるザンジバル島の水事情の視察（ザンジバル水公社（ZAWA）訪問、ホームステイなど）を中心に組まれていた。そのため、国内事前研修の段階では「水道などのインフラ整備の状況」や「世界遺産の功罪」に関する素材を集めようと考えていた。しかし、結果としてそれ以上のものが得られた。

こうした大きな収穫があったのは、私的な海外旅行では訪問出来ない場所を見学したり、会うことの出来ない人たちの話を聞けたりしたからである。そうした機会を今後どのようにして作るか、素材を集めるかが、開発教育に取り組む上での課題である。

3. タンザニアから学んだこと

（1）開発や援助の在り方

今回の研修を通じて、最も勉強になったのは「開発や援助とはどうあるべきか」ということだ。開発や援助とは、「タンザニアの人たちだけで事業が出来るようになること」つまり「自立を助けること」であり、「人を育てること」であると学んだ。

これは岡田大使、JICA タンザニア事務所の職員、日本人専門家など、現地で働く日本人の方々が共通しておっしゃっていたことだった。経済的発展を目指し、金銭的な補助をすると、いわゆる「援助慣れ」を引き起こしてしまう。それが必ずしもその国や地域、住民のためになる開発や援助の形ではないということを、生徒に教育で伝えていきたい。

（2）教育格差

国内事前研修で過年度参加者やタンザニアで活動していた元青年海外協力隊員から、「英語が公用語だがほぼ通じない」と聞いていた。しかし、今回の研修期間中に現地で英語が通じずに困った思いをしたことは、あまり無かった。

これは、タンザニア国内の教育格差が大きく影響していると思う。今回訪問したキラカラ中等学校はタンザニア有数の進学校で、ザンジバルでホームステイしたのは教育レベルが極めて高い家庭だった。(9歳の女の子はフランス語とアラビア語を勉強していた。また、英語で放送されている子供向けのテレビ番組を観ていた。)ホームステイ先で会った医学生青年は、教育を受ける理由を「良い職業に就いて豊かな暮らしが出来るから」と語ってくれた。日本同様、タンザニアも経済格差と教育格差が関連している現状を目の当たりにした。

(3) スワヒリ文化

英語を公用語とする一方で、国語であるスワヒリ語を重んじていた。スワヒリ語の格言がプリントされたカンガという布を女性たちがまとい、格言の意味を説明した本も街中で多く見かけた。また、エレベーターに乗り合わせた見知らぬ人にも「Habari? (元気?)」と挨拶されたこともあった。元々はニウレ大統領の言語政策であるかもしれないが、英語科の教員として、言葉を大切にする文化に感心した。

(4) ジェンダー

タンザニア電力供給公社(TANESCO)では女性役員も多く、日本人専門家の方は「女性の社会進出は日本より進んでいると思う」とおっしゃっていた。また、ホームステイ先のご婦人も法律を学ぶ大学生で、将来弁護士を目指していた。彼女に、日本では既婚女性で学校に通う人は少ないと話す、とても驚いていた。

その一方で、その婦人と子供(女の子)が家事全般をこなしていて、男性が手伝っている様子はあまり見られなかった。他の参加者が滞在した家庭の状況を聞く必要があるが、女性が社会に出ていても、あまり家事の分担はなされていないのかもしれない。

また、キラカラ中等学校の教員やタンザニア電力供給公社(TANESCO)の課長から、「女子の理数離れ」があると伺った。この問題は「リケジョ」という言葉が生まれる日本も同様である。今後、その原因を考察してみたいと感じた。

(5) アフリカと日本の‘心理的’距離

キラカラ中等学校で生徒や教員に「今の生活で困ったことはありますか?」という質問をしたところ、全員から「無い」という回答が得られた。また、何を答えて良いか分からないという風に困っているようだった。そもそもこの質問が、「タンザニアの人は困っているだろう」という前提に立っており、タンザニアのことを日本の尺度で測ろうとしていたことに気付かされた。

また、研修期間中、タンザニアの人に日本で有名なキャラクター(ドラえもんやピカチュウなど8つ)の絵を見てもらい、どれが一番好きかアンケートを実施した。その中で、多くの人がほぼ全てのキャラクターを知らなかったことが分かった。最初は意外な結果のように思えたが、日本人の多くもタンザニアについて詳しいとは言えない。岡田大使も「まだまだアフリカに目を向けている日本企業は少ない」とおっしゃっていた。アンケート結果は、日本とタンザニア、アフリカとの‘心理的’な距離感を象徴しているのかもしれない。

4. 今回の研修経験をどのように教育活動に活用しようと思っているか

これまで英語を教育する中で、必ずしも「英語が出来る人」＝「国際社会で通用する人」ではないと感じてきた。国際社会で通用する「違いを受け入れることが出来、その上で相手のことを考えられる人」を育成する教育に、今回の研修経験を活かしたいと考えている。

具体的には、英語または総合的な学習の時間に、以下に挙げる2段階のアプローチで問題解決型

学習を実践したい。

- ① フォトランゲージ：まず、生徒にタンザニア、ひいてはアフリカへの興味関心を引き出すことで、現地の人への共感を深め、②の問題解決型学習の導入にする。写真や現地で購入した教材を使って、タンザニアで感じたこと、日本との相違点や共通性を伝えたい。
- ② ランキング：次に、タンザニア国内の事情を取り上げ、「あなたがこの状況に置かれたら、どのように行動しますか？」というテーマでグループワークをさせる。話し合いを通じて、「開発や援助に正解は無い」「開発とは経済発展ではなく人を育てること」という JICA タンザニア事務所の職員の方から聞いた思いを生徒に伝えたい。

以上の授業を実践する上で留意すべきことは、対象が高校生であることから、異文化を理解することにとどまらず、開発や援助の在り方について考えさせる内容にすることである。

5. 今回の研修に参加してよかったことや、よりよくするための提案

- (1) ザンジバルでのホームステイは大変貴重な体験だった。私のステイ先は生活水準、教育水準ともに非常に高く、冷房や IH コンロを完備していた。ステレオタイプ的な貧しいアフリカの家庭が多く、世界最貧国の1つとされるタンザニアにも、そうした裕福な家庭があることを知り、貧富の差を実感した。しかし、そのステイ先でも蛇口から水が出なかったことは驚いた。この現状は、実際に現地の生活に入らないと知ることが出来なかった。是非、今後の教師海外研修にもホームステイを検討して欲しい。
- (2) 教員として恥ずかしいことだが、これまでインフラ（水道・電気）や医療について深く考えたことはあまり無かった。今回の研修に参加したことで、私自身が学習者の立場として学ぶ機会を与えて戴いた。

6. 海外研修での役割（各担当や日直）を振り返っての感想・提案など

- (1) 記録係
研修先での写真撮影を担当した。撮影が制限される場所では、記録係2人で役割分担をしたり撮影位置を変えたりするなどの工夫をした。
- (2) ホテル係
チェックイン時の手配、朝食時間と場所の確認、Wi-Fi が使用できるか、移動時の荷物の個数の確認をした。特にチェックアウト時のルームキーの返却には気を配った。3名（男性1名、女性2名）で担当したが、女性の参加者が多かったこともあり、妥当な人数だったと思う。
- (3) 日直
主に移動する際の点呼と日誌の記入を担当した。しかし、日直がグループ全体の行動を見渡して、時間管理に気を配った方が同行する JICA 職員の負担が軽減されると思った。（各訪問先で参加者それぞれが写真を撮ることや見学することに夢中で、グループが離れてしまったり、行程が遅れてしまったりすることがあったため。）

7. その他、研修全般を通じての感想・意見など

- (1) 過年度に比べて現地の学校への訪問が少なかったが、その分、タンザニアへの教師海外研修で初めてザンジバル島を訪問することが出来た。JICA の職員の方々をはじめ、このプログラムを作り上げるために尽力して下さった全ての方々に、この場を借りてお礼申し上げた

い。

- (2) 参加した教員の校種や経歴、年齢が様々で、参加者から学ぶことも多くあった。そういった意味で、この研修に参加することそのものも異文化理解であると思う。
- (3) プログラム内容が濃密なため、得られた素材や自分の考えをまとめる余裕が無かった。毎日の振り返りでは、各自で作業する時間を取っても良いかもしれない。

8. 今後の本研修参加者へのアドバイスなど

- (1) 参加者同士の校種や担当教科の特性を踏まえておく必要がある。同じ教員という立場ではあるが、それぞれの学校業務で当たり前とされていることが、他の参加者には当たり前でないことがあった。国内事前研修や現地での打ち合わせの際、意見交換をすると良いと思う。
- (2) 海外旅行に慣れていると自負している人ほど、「旅行」と「研修」の違いを認識しておくべきだと思った。「個人的にやりたいこと」と「他の参加者との共同でやること」を分けて考える、疲れを感じる前に離団して休む など)
- (3) 帰国時にダルエスサラームの空港で両替する際、両替所のスタッフと軽いトラブルがあった。両替や支払いなど金銭に関わることをする際は、必ず複数人で行動すべきである。

9. 各訪問先等の所感

日時	テーマ	所感
8月11日(月) -12日(火)	日本からタンザニアまでの移動中および現地到着	羽田空港発、ドーハへ。ドーハの空港は改装直後で非常に綺麗だった。イスラム教の祈祷室があり、早くも異文化を体験した。ダルエスサラーム空港からホテルへ向かうまでに渋滞に捕まったが、車窓を楽しみながらタンザニアに到着したことを実感した。
8月12日(火)	JICA タンザニア事務所表敬研修ブリーフィング	タンザニアの全般情報、安全対策、健康管理に関するブリーフィング。 経済成長が著しいが、インフラの整備が出来ていないことや犯罪の増加についてレクチャーを受けた。
8月12日(火)	本日の振り返り	今日印象に残ったことを共有した。
8月13日(水)	JICA タンザニア事務所研修ブリーフィング	タンザニアにおける JICA の事業、教育事情、水セクターに関するブリーフィング。 「国際協力」というとハード面（災害派遣など）をイメージしがちだが、ソフト面（地方行政を担う人材育成など）もあると気付かされた。
8月13日(水)	ザンジバルへ移動	JICA タンザニア事務所近くの食堂 POSTA HOUSE で昼食。3000～5000Tsh(180～300円)でウガリやピラウなど定番タンザニア料理を楽しんだ。その後、

		フェリーでザンジバルへ。
8月13日(水)	隊員との懇談会	ムナジモジャ病院に勤務する沢谷隊員をはじめ、現地で勤務する隊員との懇談。 現職教員参加制度で赴任した隊員から、ザンジバルはまだ体育教育は普及しておらず、教員志望の大学生に体育を教えていることを聞いた。
8月13日(水)	本日の振り返り	懇談会で得たことを中心に共有した。 ザンジバルの医師不足の原因の一つは、給料が安く、ダルエスサラームへ人材が流出してしまうためだという。(ダルエスサラームの方が3倍高い)
8月14日(木)	ムナジモジャ病院 沢谷隊員 活動視察	沢谷隊員と上司の方の案内で、入院病棟とリハビリ病棟の2グループに分かれて見学。(宗教上の観点から、外科病棟が男性用、女性用に分かれていた。) 入院病棟には入院している子どもたちと一緒に母親も寝泊まりしていた。折り紙をプレゼントしたところ、非常に喜ばれた。 リハビリ病棟の見学では、付き添いで来ている母親の子どもに対する関心度に温度差があるように感じた。沢谷隊員から子どもに無関心な母親も多いので、親に興味を持ってもらうこともテーマだとうかがった。
8月14日(木)	専門家との懇談会	ZAWAの専門家の方たちと懇談。 総括の崎山さんから「人としては‘水’が一番大切だと思っている。しかし都市水道の整備という意味では、‘道路’‘電気’‘水’の順に整備すべきだと思う。」というお話をうかがった。
8月14日(木)	ザンジバル水公社(ZAWA) プロジェクトサイト視察	上水の整備施設を中心に見学した。湧水、井戸群、配水池を訪問した。海に囲まれ、低地であるザンジバルの地理的特徴から、海水をきれいな水にすることがいかに大変な作業であるか分かった。
8月14日(木)	本日の振り返り	ムナジモジャ病院で得たことを共有した。また、翌日からのホームステイで各家庭の水回りをチェックすることを共有した。
8月15日(金)	ザンジバル水公社(ZAWA) プロジェクトサイト視察	水が人に届くまでの過程を見学した。配水池、給水地区、ストーンタウンに訪問した。一番驚いたのは、ストーンタウンにモスクが経営する違法の水タンクがあったことである。 実際にZAWAの利用者に話を聞くことが出来た。「安全な水が手に入るのは、お金がかかっても嬉しい」

		<p>という意見もあれば、「お金を払っているのだから、24時間水が使えるように整備して欲しい」という意見もあった。</p> <p>安価で安全性は高いが断水もある ZAWA の水と、高価で安全性は劣るが24時間使える違法業者の水。自分が住民の立場だったらどちらを選ぶだろうかと考えてしまった。</p>
8月15日(金)	ホームステイ先との交流	<p>滞在したのは、モハメドさんと第二婦人のファトゥマさんのご家庭。ザンジバルドアのある立派な家で、電子機器(TV、冷房、IHコンロ、冷蔵庫など)はほとんど揃っていた。</p> <p>ツアーガイドのファトゥマの父親、ウシさんの案内で、博物館や市場に行った。市場は海産物が多く、競りをやっていて活気があった。</p> <p>ファトゥマとリリ(9歳)と3人でナイトマーケットに行った。屋台で肉の串刺しを買って食べたり、リリが有料の遊び場で遊んでいる間、ファトゥマと話をしたりして過ごした。</p>
8月16日(土)	ホームステイ先との交流	<p>7時頃目が覚めると、家族は皆起きていた。(イスラム教徒の朝は早いと思う。)家にはファトゥマの親族も多く出入りしているようで、ファトゥマの兄、ハッサンも交えて朝食を食べた。</p> <p>午前中は、リリとハッサンと日本について話をした。(その間、ファトゥマは忙しそうに家事をこなしていた。)</p> <p>昼食後、モハメドさんとファトゥマがスパイスガーデンに連れて行ってくれる。(人生で初めてココナッツの実を食べた。)</p> <p>その後、ホテルまで車で送ってくれたのだが、15時の集合に遅れそうになるとモハメドさんがとても気にしてくれていた。「アフリカ人は時間を守らない」と言われるが、海外留学と勤務経験のある人は、やはり異文化に合わせる事が出来る人なのだと感じた。</p>
8月16日(土)	教材購入	<p>ホテル近くの郵便局で葉書と切手を購入。観光地のザンジバルらしく、ポストの投函口は「国内行き」「海外行き」に分かれていた。</p>
8月16日(土)	本日の振り返り	<p>ZAWA のサイト視察とホームステイについての意見を共有した。各家庭の事情が全く異なり、夕食時まで話題が尽きなかった。</p>

8月17日(日)	ダルエスサラームへ移動	朝7時のフェリーでザンジバルを後にする。港の公衆トイレは、水が無いからという理由で使えなかった。
8月17日(日)	モロゴロへ移動	ダルエスサラームから陸路をバスで6時間行き、モロゴロへ。長時間の移動もあり、やや体調不良になった参加者もいた。途中から、ドドマ大学で日本語を学ぶサラさんが同行してくれた。
8月17日(日)	隊員との懇親会	懇親会の前に、キラカラ中に勤務する稲村隊員と近くのムグラシ中に勤務する赤堀隊員、サラさんの案内で買い物へ。カンガ(スワヒリ語がプリントされた布)を買い、地元の市場へ行った。市場はザンジバルと違い、野菜や日用品が多く並んでいた。市場にはムグラシ中の生徒が多くいて、話し掛けてきてくれた。(あまり英語は得意ではないようだった。) 懇親会では、キラカラ中とムグラシ中では教員の服装や雰囲気が違うなど、日本と同様に各校の校風あることが分かった。
8月17日(日)	本日の振り返り	翌日のキラカラ中等学校での交流手順などを確認した。
8月18日(月)	キラカラ中等学校 稲村隊員 活動視察	まず、学校の施設を案内してもらう。全寮制のため寮や食堂、チャペルやホールを見学した。試験を控えた時期ということもあり、多くの生徒が一生懸命勉強していた。学校内の掲示板には格言や「SPEAK ENGLISH(英語を話そう)」といった標語が貼ってあり、生徒の意識を高める工夫をしていた。 稲村隊員の授業見学では、難しい内容を生徒たちが英語で理解していることに驚いた。その一方で、教室の後ろの方に座っている生徒たちはノートを準備しておらず、あとで他の生徒に写させてもらうという生徒もいた。いわゆる詰め込み教育だというタンザニアの教育事情を垣間見たように思う。 交流活動では、生徒の名前を聞き、カタカナで見本を書いて、ペン習字を体験してもらった。こちらが思っていたよりも作業が早く、キラカラ中の生徒の能力の高さを実感した。 また、日本からの生徒の写真を見せると「どの子が格好良いか」という話で盛り上がっていた。年

		<p>頃の女子生徒の反応は日本もタンザニアも同じで、非常に微笑ましかった。</p> <p>最後に、日本の生徒が作ってくれたものをプレゼントしたり、「明日があるさ」を歌ったりした。そのお返しとして、生徒が「歩いていこう」を歌ってくれたのには、心から感動した。半日という短い時間だったが、非常に有意義な時間となった。</p>
8月18日(月)	ダルエスサラームへ移動	6時間かけてダルエスサラームへ戻る。ダルエスサラームに近づくにつれ、近代的な建物や渋滞が発生し、都会であることを実感した。
8月18日(月)	本日の振り返り	キラカラ中の交流活動で、各グループで生徒に質問して得られたことなどを共有した。
8月19日(火)	タンザニア電力供給公社(TANESCO)プロジェクトサイト視察	<p>まずはレクチャーを受け、タンザニアが地理的特性から東アフリカ諸国の電力連携で重要な役割であることを学んだ。</p> <p>その後、施設を見学へ。その中で TANESCO が 2002 年に民営化した際に、研修所を 2 つ売却してしまい、カリキュラムが散らばってしまった状態から、今の Teaching School を作り上げた苦勞を聞いた。</p>
8月19日(火)	教材等購入	ショッピングセンターやティンガティンガ村で教材を購入。会計係から、事前に帰国日までにあと何シリング必要か目安を知らされていたので、買い物がしやすかった。
8月19日(火)	本日の振り返り	TANESCO のサイト視察と研修全体の感想を共有した。ZAWA は「今ある課題を解決すること」に、TANESCO は「ゼロからスタートすること」に尽力しているのという意見が出された。
8月20日(水)	JICA タンザニア事務所 報告会	<p>各自が研修で得たこと、それをどのように活かしたいか、驚いたことについて報告した。</p> <p>次長から「伝え方は難しいが、現地を見てきた人が楽しそうに話すのが一番。アフリカの今と未来を伝えてほしい」というお言葉を戴く。</p>
8月20日(水)	在タンザニア日本大使館 表敬訪問	<p>岡田大使との懇談。</p> <p>各自が研修で得たこと、それをどのように活かしたいかを報告した。</p> <p>大使からは、「日本を経済的に発展させることが、自分の仕事の一側面ではあるが、それだけでは中長期的な成功は得られない。まず、タンザニアの人たちに日本に対する感謝の気持ちを持ってもらうことが、結果的に日本の国益になる」というお</p>

		話が聞けた。また、日本ではアフリカに対する関心が低いという現状を指摘された上で、「抽象的な〇〇人としてではなく、友達として知って欲しい」とおっしゃっていた。このメッセージは、是非生徒に伝えたい。
8月20日(水) -21日(木)	タンザニアから日本までの移動中および日本到着	往路でも利用したドーハの空港は、設備は綺麗だが、トイレの使い方が汚いように感じた。タンザニアで水回りチェックするクセがここでも生きていた。